

## 21 世紀のアルカディア ―小さな共同体の挑戦―



自然生クラブ設立者 柳瀬 敬

### はじめに

同時代に生きるものとして、「どんな社会に暮らしたいのか」という問いかけは本質的である。同時代に生きるものとして、共有する価値観があるならば、あらためてそれに疑問を持たねばならない時があり、2011年3月11日の東日本大震災とそれに続く福島第一原発の事故は、1945年8月15日の敗戦と同じくらいの価値観のゆさぶりが起こるのではないかと感じている。現代日本にあって、科学技術の進歩に対して、人間の精神に関わる問題、哲学、思想、教育、政治といった領域が停滞し、新しく社会を構築していく力が、極端に衰えているのではないか。その意味では、共有する価値観をむしろ喪失したのかもしれない。今、未曾有の大災害のあと、この時にこそ、新しい価値を共有する必要がある。私たちは、この21世紀に、どんな社会に暮らしたいのか。

### アルカディア

どの時代にも人々はユートピア(理想郷)を求めていた。それは人間の想像力によるものである。現実にはありえない社会であり、空想だとされる。しかしながらこの現実社会の彼岸に、確かに観念として存在する。近代科学の発達した現代にあって、ユートピアはメビウスの輪のごとくパラダイムに組み込まれて、新しい神話をつくっていることを見逃してはならない。原発の議論が、新しい神話になる所以である。さて、古代ギリシャの人々が空想したアルカディアに思いを馳せる。そこは、何の変哲もない山村だったという。むしろ農耕に適さない痩せた土地で、家畜の放牧が行われていた。しかしアテネの都市国家に住む人々は、そこに牧歌的な理想郷を想像した。「アルカディアに暮らす人たちは、まるで宗教儀式でも行うように農業にたずさわっていた」という言葉の中に、豊穡の神デメー

ターの姿が見えてくる。一方、アテネの社会は奴隷の労働に支えられ、モノづくりや職人的技術が、哲学や形而上学的知識に対して、低い扱いを受けていた。アルカディアに対極にアカデミアがある。

## 小さな共同体の始まり

筑波研究学園都市から筑波山麓を眺めるとき、そこにアルカディアを想像してもおかしくはないだろう。いくぶんロマンチックな思い入れだ。筑波山の南麓は大きな開発が入らず、昔ながらの田園風景が広がっている。この土地に、障害者と共に暮らす小さな共同体をつくりたいという夢をいただいたのは1990年だった。私は、筑波大学を卒業したあと群馬県にある私立白根開善学校で教師をしていた。この学校は東邦大学で教育学を教えていた本吉修二氏が、ご自身の教育理念を実践するためにつくった学校で、山奥にあり全寮制で、学力試験はせず、求めがあればよほどのことがない限り入学を拒まないという学校だった。この学校では、モノづくりや職人的技術が重んじられていた。山奥の共同生活では、ただの知識は役に立たない。例えば、森を学んでも、山に入り木を切り、薪にしてストーブにくべなくては厳冬の冬に暖がとれない。学校のまわりには畑がつくられ、森に木が植えられた。この学校で学んだことは、生きる力そのものだったように思う。生徒も教師も共に小さな共同体の人になる。この学校が核となり、まわりに村が出来るはずだった。本吉氏もそれを望んでいたと思う。R. シュタイナーのキャンプヒル共同体が一つのモデルとなった。しかし、共同体の構想にブレーキがかかったのである。当時、日本の社会は、グローバル化し、貿易の自由化、金融の自由化、そしてバブル経済へと突き進んでいった。生きる力とは、生活する力ではなく、社会の変化に適応する力だという考えが主流となった。山の学校の生徒たちも、いずれ山を下りるならば、その一人一人がどんな社会で生きていくのだろう。そう考えると、教師も悩んだ。1980年代の後半のことである。私は、思い切って学校を退職した。そして、学生の時代を過ごした筑波に戻った。再び見た筑波山麓の田園は、私にとってまさにアルカディアだった。私の見た共同体の夢について来てくれた仲間がいた。そして知的な障害をもつ人たちと共に、小さな共同体が始まったのである。

## 自然生クラブの設立

又次沢は筑波山の女体山から流れ落ちる。昭和30年代まで水車がまわり、近隣から米を搗くために馬が上ってきたという。沢水を利用して水車を回していた農家が空き家となっていて、借り受けることができた。驚いたことに、そこにはモノづくりの道具がそっくり残されていたのである。馬具、水車道具、炭焼き窯、養蚕道具、葉タバコの乾燥小屋、味噌樽、醤油甕、そして様々な農具と山仕事の道具など。近代産業社会になってすたれていったものが、まだ生きづいていたのである。これを共同体の礎としよう。そう直感した

私は、うれしくなってその場で小躍りしたのである。「自ずから然るべく生きる」ことを旨とし、この活動を自然生（じねんじょ）クラブと名付けた。ヤマイモクラブだ。日本の社会はバブル経済にうかれ、大量生産・大量消費社会が到来、ウルグアイラウンドによる海外農産物の輸入拡大など、大きく動いていたように思う。しかし、本当の豊かさとは何なのか、どんな社会に暮らしたいのか、という本質的な問いに答えるためには、自ずから然るべく生きるしかないと考えた。そして農園を手掛けた。

## コミュニティー農園



ずぶの素人が農園を始めたのである。失敗の連続だった。それでも、自分で蒔いた野菜が育って、買ってくれる人があるわけだから、嬉しかった。しかし、初めて青果市場にネギを出荷したら、最低価格で箱代にもならなかった。街の団地に引き売りに行くと、主婦の目は厳しく、売れ残った不揃いの野菜が不憫でならなかった。有機農業とは何なのか。市場（しじょう）とは何なのか。ずぶの素人百姓だから、考えることも多かった様に思う。労働についても考えた。お金のために働くならば、農業は割に合わない。土にふれて、風にふかれて、太陽の光を浴びることに喜びがなかったら、農業に魅力はない。命のための農である。まず、自分の食べるものをつくり、それをみんなに分ければいい。収益が上がる作物がいいのではない。自分で食べる野菜が一番価値のある野菜なのだ。普通に考えれば、これは趣味の家庭菜園である。しかし、この家庭菜園が共同体の礎となっていくのである。こんな考えに賛同してくれる人たちがいて、食べ物で結ばれるコミュニティーが出

来ていった。市場（マーケット）を一切通さない。市場価値ではなく、絶対価値、固有価値の世界が少しずつ広がっていった。そこに小さな経済が生まれ、生活が成り立っていった。これが新しい価値の共有であり、小さな社会の構築である。

### 知的障がいのある人たちと暮らす

自然生クラブの始まりから、知的な障がいをもつ人たちと一緒にだった。そのことは私にとって大きな救いだった。彼ら一人一人の存在の価値は、絶対的で、固有である。だがそのことをどう表現したらいいのか。労働を市場と考える近代資本主義経済にあっては、人間の労働は生産手段の一つに過ぎない。つまり道具である。人間は、労働を市場で売るわけである。この価値観の中で、知的な障害をもつ人たちが、どんな扱いを受けるか、簡単に想像できるのではないだろうか。社会は、彼らを隔離し、保護した。自由を奪われ、尊厳を失った人たちのノーマライゼーション（当たり前権利をもつこと）が言われ、あらためてインクルージョン（社会包摂）していこうという運動があることを、奇妙に思わないだろうか。そもそも近代社会が産業化する中で作り出された概念が福祉である。小さな共同体に暮らす障がい者にとって、ノーマライゼーションもインクルージョンも意味がない。どんな暮らしをしたいのか。彼らと、一緒に考え、一緒に生きていく。そのことで、私は、近代社会の価値観の呪縛から解放された。

### 劇場と美術館のある暮らし

ヨーロッパの街には、劇場や美術館（ミュージアム）がたくさんある。それは芸術を大切にする文化だからと言ってしまえば簡単だが、日本のように劇場や美術館が商業的にも成り立ちにくいし、文化を育てる場所にもなっていない現状を見ると、やはり芸術・文化について根本的な価値観を問い直さなくてはならないと思う。劇場や美術館には、創造の喜びがあり、人間のもっとも人間らしい価値の表現があると思う。劇場や美術館は自由で楽しい所だ。私たちの小さな共同体は、自分たちの劇場と美術館をつくってしまった。かれこれ10年前になるが、山麓の農協の所有する大谷石の米倉を借り受け田井ミュージアムをオープンさせた。劇場とアトリエがある。自然生クラブのメンバーはここで自由に太鼓を叩き、踊りをおどり、絵を描く。その作品が、折々に発表される。また劇団や音楽家、美術作家にもこの場所が自由に開放されている。私たちは劇場と美術館のある暮らしを、日々楽しんでいる。そして、2年前、農協からこの米倉を買い取った。事務所はカフェに改装され、芸術・文化の交流はますます盛んになっている。



## 共同体が生んだ「創作田楽舞」



自然生クラブが2009年度の国際交流基金の「地球市民賞」をいただいたことは、本当に名誉なことだった。私たちは、国際協力や交流を目的とした団体ではなかったが、小さな共同体で生まれた創作芸能が海外でも認められ、ヨーロッパを中心に演劇祭に幾度も招待されたことが評価された。しかも、私たちの表現活動の中心は知的な障がいをもつ人たちの即興性にゆだねられていることに、関係者は驚いた。私からすると、彼らの即興性は当然の表現スタイルで、過度に演出しようとするオリジナリティーを失うばかりか、創造性に乏しいものになってしまう。さらに、農園でともに働き、暮らすものたちの共同性が農耕儀式として舞台上で表現されるのだ。アルカディアで行われたことを思い出す。「彼らはまるで宗教儀式を行うように創作田楽舞を演じる。」

[柳瀬 敬 (やなせたかし) ]

1958年 愛媛県今治市生まれ。筑波大学で教育哲学を学ぶ。群馬県的全寮制私立学校、白根開善学校で自由教育を実践。90年 筑波山南麓に自然生(じねんじょ)クラブを設立。知的障がい者と共同生活しながら有機農業と表現活動に取り組む。2001年にNPO法人化。地域の米蔵をミュージアムとし、シアターとアトリエを運営している。自然生クラブは「創作田楽舞」でこれまでにリトアニア、デンマーク、イギリス、香港、ベルギー、アイルラン

ド、ドイツ、スイスの演劇祭に出演している。自然生クラブは2009年度国際交流基金「地球市民賞」を受賞。